

# 膵IPMNの手術適応

和歌山県立医科大学第2外科 廣野 誠子, 山上 裕機

## KEY WORDS

- IPMN
- 手術適応
- 悪性
- 再発

Surgical indication for IPMN.

Seiko Hirono (講師)  
Hiroki Yamaue (教授)

## はじめに

膵管内乳頭粘液性腫瘍 (intraductal papillary mucinous neoplasm ; IPMN) は、近年、画像診断の精度や技術の向上に伴い、その頻度は増加している。IPMNは、通常型膵癌と比べ、その進行速度は緩やかで予後良好とされている。そのため、良性と診断された場合は、外科的切除ではなく定期的なフォローアップが行われ、悪性を疑う症例のみ、手術の適応と考えられている。すなわち、IPMNの悪性因子を同定し、手術適応を決定することは、IPMNの治療方針において最も重要なことである。しかしながら、IPMNにおける悪性の定義や手術適応に関するコンセプトは、施設間で大きく異なり、確立したIPMNの治療方針はいまだないのが現状である。本稿では、IPMNの手術適応に関する当教室の研究結果と多施設共同研究の結果を紹介し、IPMNの治療方針について述べる。

## I. IPMNの画像分類と病理診断

IPMNは、画像診断において、分枝型・主膵管型・混合型の3種類に分類される<sup>1)2)</sup>。施設間で若干の異なりはあるが、一般的に、分枝型IPMNは、主膵管と交通を認める10mm以上の分枝嚢胞を認めるが、主膵管の拡張は認めない(< 5 mm)もの、主膵管型IPMNは、主膵管の5 mm以上の拡張を認めるが、分枝膵管の拡張は認めない(< 10mm)もの、混合型IPMNは、拡張した主膵管(≧ 5 mm)と、主膵管と交通のある10mm以上の分枝嚢胞を認めるものとされている<sup>1)-3)</sup>。

IPMNの病理診断は、2010年に定義されたWHO分類によりlow grade-dysplasia (LGD), intermediate grade-dysplasia (IGD), high grade-dysplasia (HGD), invasive intraductal papillary mucinous carcinoma (IPMC)の4つに分類される<sup>2)4)</sup>。